

令和4年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第62巻3月号(通巻752号)

風土



3

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

かまくらに給ぶ甘酒硬貨置き

あまゆつこ

(句集『竹取』より昭和三十五年作)
これは秋田県横手市の「かまくら」を吟行したときのものです。「かまくら」の中の童たちが、「あまゆつこあがつてたんせ」と、道行く人に呼びかけている言葉をそのまま俳句に用いています。また「給ぶ」は、「かまくら」で水の神を祀る童たちを尊んで使った言葉です。甘酒を頂いた桂郎師は、お賽銭としてながしかの「硬貨を置いて「かまくら」を後にしました。

花冷や姉妹が遺骨持ちかふる

(句集『竹取』より昭和三十五年作)
この句には「松本城山墓地に杉田久女の墓建つ、即ち納骨に列して」の前書があります。久女の墓は愛知県の杉田家がありますが、夫の宇内の考えもあり、松本に分骨したのです。桂郎師はその納骨に参列しました。姉妹とは、久女の長女昌子と次女光子です。花冷の中を、姉妹が代わるがわる分骨の壺を抱いて行く様子を描いています。

神威器俳句鑑賞

南 うみを

寒鯉の上一尺の水眠る

(句集『水輪』より平成二十年作)
この句は「寒鯉」そのものを詠むのではなく、その上の水に焦点を当てたところに工夫があります。「寒鯉」が水中に眠るようにじっとしているのを、「一尺の水眠る」と表現し、水もまた微動だにしないのだと読み手に伝えています。器師は「寒鯉」に感情移入することにより、寒の頃の鯉とその水の重々しさを得ることができたのです。これも器師の「命二つ」の理念が表出された作品となっています。

冬満月人のくさりのちりぢりに

(句集『水輪』より平成二十年作)
器師は、この句を収めている句集『水輪』を含め、句集『月の道』、『月虹』と句集名を月を表す言葉にしています。『水輪』は冬の月のことです。器師にとって月は特別なもので、「寒満月妻ののぼりしあとのなし」(句集『貴椿』)とあるように、死者の魂の月なのです。「冬満月」を仰ぎながら、この世の人との関係性が、「ちりぢりに」になっていくのを実感しているのです。孤独感が死者の魂の月への想いを募らせています。

初 明 り

南 う み を

遊行寺三句

一つ火待つ冷たき椅子に身じろがず
底冷の闇に一つ火生まれ出づ
一つ火果つ南無阿弥陀仏万唱へ
冬うらら骨董市はしやがませる
浮鴨に浅き眠りと深ねむり
わからなくなる着ぶくれか身ぶくれか
野焚火を終へし生焼け何々ぞ
長寿眉焦げんばかりや楯の主
一茶忌の座りの悪き茎の石
大年の鍬よ鎌よと磨くなり
初明りそのまま若狭雪明り
米朝を堪能したる茶碗鮓



竹間集

同人作品



十二月

門伝史会

おほかたは四捨五入して年の暮
南天の一粒づつに日の宿る
山脈の紫霞み年つまる
夕照の水脈曳く鳩の流れをり
浮かび出て二羽となりたるかいつぶり
日に酔ひし紅葉の山も昏れにけり
八つ橋の肉桂の香も十二月

三日の雀

浜 福恵

殉難碑に午後の日ざしや枇杷の花
裸木となりても朴の抽ん出て
数へ日や葱青々と囲はるる
こんなはずじやない寂しさを湯奴に
ふるさとの銘酒届くを年酒とす
子孫曾孫仏間に集ふお元日
葦の茂みの晴るる三日の雀らに

朝 湯

山田 暢子

水面にも明かり揺れぬて大晦日
元旦の静けさ風の音ばかり
一年の計は立てざり初御空
書初めに一日が暮れて仕舞ひけり
朝湯して誰にも会はず早や三日
マスクして行き過ぎてより振り返る
山茶花（山田久子さんへ）や何処へ行きても影の人

牡蠣割

岩木 茂

牡蠣割の音して曇る小屋の窓
海鼠より糶の始まる時化の朝
ぐんぐんと朝日子昇る浜焚火
鶏の羽根雪に散らばるクリスマス
湖底より日の射して来る冬木立
かはたれののつぺらぼうの枯野人
除雪車のあとついて行く婚礼車

冬 風

田中佐知子

包丁を噛みたる冬至南瓜かな
小児科病棟窓に聖樹の明滅す
冬風の湾に沿ひたる舟屋群
冬怒濤 大敷網の海覆る
雪催海の生簀の騒めきぬ
数へ日の喪中葉書の余白かな
訃報受くいつしか雪になつてをり

なづな爪

小林 輝子

胸乳まで柚子寄せ仕舞風呂の婆
蕪鮓の蓋明け米寿迎へけり
終日をホワイトアウトお正月
存外の積雪孫ら帰京急く
新たなる句帳に記す寒の入
何なさずとも伸びてゐるなづな爪
霏々と雪陸の孤島の村に栖む

マスクの顔

中村 洋子

古書市のマスクの顔の横並び
花文字の異国の絵本クリスマス
脇役のボーイソプラノ聖夜劇
朴落葉振り向けばまた朴落葉
冬籠する気のなくて靴を買ふ
ギタリスト足を組み替へ日短か
石投げて暮れ行く年の川の音

連 凧 橋添やよひ

お火焚や熱々みかん袖に受け
包丁噛む冬至かぼちやの頑固かな
返礼すマスクの人を知らぬまま
断捨離の身軽さにをり竜の玉
もう少し生きてゐたしと葉喰
連凧や空の奥へと底力
産土は疫鎮めなる淑気かな

九条葱 浅田光代

浮御堂一辺よりの大噓
待ち人のゆつくりと来る耳袋
采配の老いの掌厚き注連作
年の市黄衣の僧は葉缶さげ
みづうみの膨らんでゐる浮寝鳥
朝市の一束残る九条葱
ぼうと見てをり一月のカレンダー

神 域 柿沼 盟子

髪切つて初冬の風をやさしとも
たんぽぽの返り咲きには触れずおき
蒂残る柿の小枝や雪もよひ
神域は鳥獣保護区日短か
笹鳴の右へ左へ神の山
舞楽待つ白き床几や竜の玉
底冷えや我が神将に灯を献ず

初 詣 高村 令子

大旦まだ夢覚めぬ峡の色
駆けて来る児の白息を抱き止む
おんぶしたり抱つこをしたり初詣
老いの手に鳴らぬ神鈴初明り
摘み寄せて野の香ひろがる七日粥
娘に頼り娘に支へられ福寿草
一ページ捲りてよりの夜長かな

山河集

同人作品



南うみを選

マスクして遅刻の詫びは目と目もて 森田 節子

息白く大漁の尾を叩き切る
刃を弾く白菜ぐいと真つ二つ
あら汁の骨せせりをり年つまる
星冴ゆる我が家の上を宇宙船

茶が咲いて五十三次金谷宿 菅原 末野

短日や棒となりたる竹箒
煮ごごりの溶けて伊万里の紺の富士
冬帽子真深にうどん立食ひす
獅子舞のたたら踏みたる二人立て

納骨の骨のことんと枇杷の花 小原美姜子
虚子の墓に向き合ふ墓や冬の虹
紅葉狩獣の骨を踏みもして

瓦礫跡に置く一と束の水仙花
青菜洗ふ刃先のごとき寒の水

谷田明日香

大菊の膨らみきつて果てにけり
鍋蓋のつぶやき始む冬至粥
雨垂れの軒下に受く配り餅
兄妹は仲良くせよと福寿草
福笹の波搔き分けて割烹着

三好 康子

鴨の陣組むによき数二十四羽
持て余す首を納めて浮寝鳥
着ぶくれて心の闇に迷ひ込む
白菜を一壺のごとく立てて置く
北窓を残して蔓の枯れにけり

風土独語／南 うみを

息白く大漁の尾を叩き切る

森田 節子



この句は何の魚かは伝えていないが、「尾を叩き切る」から鮪を想像する。鮪の質の善し悪しは、尾の近くの肉を見れば解ると言われる。それにしても「尾を叩き切る」には迫力がある。真冬の糶市の男たちの活気が「息白く」にも表れている。

分別の膝のくづるる大噓

小原美美子

「分別の膝」とは、物事や道理をよくわきまえている人物の膝のことである。例えば豊に正座している紳士を想像しよう。その人物が「大噓」に膝を崩し慌てふためいているのである。狼狽した様子が皮肉っぽく描かれている。

短日や棒となりたる竹箒

菅原 末野

この句は「短日」と「竹箒」との取り合わせである。ポイントは「棒となりたる竹箒」をどう読むかだ。あまりの日暮れの早さに、立て掛けた「竹箒」が、暗がりの中で棒のように見えたのである。大胆な措辞であるが、「短日」で領ける。

歯応へのなくてよろしきおでんかな

山田 健太

そう言えば「おでん」の種に硬いものはない。大根、こんにゃく、豆腐に揚げ、玉子とほとんど柔らかい。「よろしき」には、明らかに加齢により歯が弱くなった作者の心情が隠されている。

福笹の波掻き分けて割烹着

谷田明日香

「福笹」は一月十日に行われる戎祭で、商売繁盛、家内安全を祈願して、縁起物を付ける笹のことである。主に関西が盛んである。この句の佳さは「割烹着」に焦点を絞ったところにある。福笹の人々でごった返す境内を急ぐ「割烹着」は露店の女性か、接待の女性か、動きのある賑やかさが描かれている。

一陽来復柴田久子はもうぬない

根岸 善行

柴田久子さんは、事情があつて離れてしまったが、「風土」同人として活躍された。「風土」六十周年の集まりで久しぶりにお出会いしうれしく思った。その久子さんが亡くなった。作者の善行さんは久子さんの佳き句友であった。お二人はお酒が好きで、私も加わり酌み交わしたこともあった。その友への断腸の思いの句である。「もうぬない」が切ない。

白菜を一壺のごとく立てて置く

三好 康子

「白菜」は普通は横にして置くものである。しかし作者は縦にして壺のように置いたのである。貫禄のある光り輝く「白菜」が見えてくる。

風土集



南うみを選

名田庄に伝ふ「陰陽」雪ばんば 舞鶴 小原美美子

顔見世のはねてすするや鱧蕎麦

老幹にしみるばかり冬の雨

石路咲いて海見ゆる丘裕明忌

分別の膝のくづるる大噓

木枯らしを包みて来る君の文 水戸 山田 健太

歯応へのなくてよろしきおでんかな

裸木の影くつきりと杣の家

意地悪の力加減や日向ぼこ

肘伸びるところに電池や年用意

仏壇も神棚も無し年用意 上尾 根岸 善行

一陽来復柴田久子はもうぬない

たそがれは静かな色や年の暮

すぐ曇る眼鏡拭きつつ年惜しむ

風筋のくつきりと出て芒原 宇治 古橋 寛人

水澄むやかはとの底に飯の粒

色変へぬ松もののふの衿侍あり

大阿蘇の風呼び込んで芒波

餅撒きの声の野太き秋祭

冬に入るぼんのくぼより湯冷めして 静岡 菅原 末野

ちやんちやんこ着て陸番の魚漁長

追熟の洋梨にほふ開戦日

空よりも土に親しき寒雀

狐火や子育て飴の店滅び

炬語りの昭和の段に夜汽車あり 秋田 石井美智子

仕事場へ己が足跡朝の雪

雪寄せの漢の身体湯気上がる

カチューシャに馴鹿の角櫛遊び

保育士はトナカイの役雪遊び